

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 2 日現在

機関番号：17102

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22720161

研究課題名(和文) 琉球語と那国島方言の記述文法書の作成

研究課題名(英文) A grammatical description of Yonaguni Ryukyuan

研究代表者

下地 理則(Shimoji, Michinori)

九州大学・人文科学研究科(研究院)・准教授

研究者番号：80570621

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円、(間接経費) 750,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では南琉球語と那国島方言の文法記述を行った。本研究では当初、記述文法書の形式で音韻から統語まで記述する予定であったが、申請後、本研究とは別に、フランスEHESSのトマ・ペラール氏と京大助教の山田真寛氏が形態論と音韻論に関して記述を進めているという事情があったため、その成果と本研究の重複はおのずと避けざるをえず、本研究の当初の計画である音韻・形態・統語の総合的な記述という部分を修正し、音韻形態の概要を示しつつ、統語の部分をもより詳細に記述した。統語的な記述の成果は書籍の一章としてすでに入稿済みであり、1報が掲載決定済である。また、音韻・形態・統語の概要について出版済・入稿済が1報ずつある。

研究成果の概要(英文)：This study dealt with the grammatical description of Yonaguni Ryukyuan. The major outcome of the project includes a syntactic description of this language (focusing on the case alignment system) and grammatical sketches of the language (in English and in Japanese). At the outset, this study aimed at providing a comprehensive description of this language in the form of a reference grammar, but I later decided to focus on a more specified area of the grammar, focusing mostly on the syntactic description of this language. This is because there is another project going on after the proposal of this project was accepted, the aim of which is to provide a comprehensive reference grammar (led by Thomas Pellard at EHESS, France and Masahiro Yamada at Kyoto University). Despite the shift in the focus of the research, the research project has turned out successful, as it enhanced the grammatical description of this language, which was the central aim of this research.

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：若手研究B

キーワード：琉球語

1. 研究開始当初の背景

本研究は、南琉球語と那国島方言の文法記述を行い、最終的にはリファレンスグラマーの形で完成させることを目指してスタートした。

与那国島方言は、ほかの八重山諸語と同様、きわめて深刻な危機に瀕しており、あと 10 年から 20 年ほどで話者数が激減することが予測されている危機方言である。しかし、この方言の研究は進んでおらず、アクセントや形態論に比べて統語的な諸現象の記述がほとんどなされていないのが現状である。このような現状において最も必要な研究は、特に研究が進んでいない統語的な領域も含め、この方言の体系的な記述を行うことである。

2. 研究の目的

本研究の目的は与那国島方言の音韻・形態・統語に至る体系的な記述を行うことである。特に、記述の少ない統語的な領域に関して詳細に記述する必要があるため、この部分を中心に研究を進める。なお、琉球語全般に関して、体系的な記述そのものがほとんど存在しないため、体系的記述に必要な調査法・執筆項目の整理なども行っておく必要がある。

本研究では当初、リファレンスグラマーの形式で音韻から統語までまんべんなく記述する予定であったが、のちに述べるように、このような単一の研究成果を作成する計画を修正し、文法概説(音韻・形態・統語)+個別トピック(統語論)の組み合わせという重層的なアウトプットを目指した。まず、調査を進めていくなかで、本格的なリファレンスグラマーを作成するためには時間的制約が大きく、すべての領域を不完全な状態で記述したのになってしまうと危惧された点が挙げられる。これを回避するためには、特に手薄な分野である統語論を詳しく記述し、ほかは概要を記述するということで対応できると考えた。実際、このやり方で、きわめて効率のよい記述ができ、かつそれぞれのクオリティが高まった。単一の研究成果から重層的な研究成果にシフトした 2 番目の理由は、本研究とは別に、フランス EHESS のトマ・ペラルル氏と京大助教の山田真寛氏が形態論と音韻論に関して記述を進めているという事情があったためである。そもそも話者が少ない状況の中で、上記の 2 者の研究成果と本研究の重複は避けたほうがよく、お互いの相互補完的な研究こそが与那国島方言の総合的記述という本研究の本来の目的にも近づく。すなわち、本研究では、音韻・形態・統語の概要を示すことでまず本研究の第一の目的である与那国島方言の体系的記述というタスクを達成し、かつ上記 2 者の研究成果であまり取り上げられない統語的な記述に重点を置くことで、本研究独自の貢献をもたらすことができると考えた。

3. 研究の方法

本研究では、まず音韻・形態・統語の概要をまとめた文法概説を作成し、それと並行して、特に手薄な分野である統語論の記述を行った。

データはフィールドワーク(与那国島および沖縄本島、東京都、埼玉県在住の話者から収集)および発行されている談話資料、2 で述べた山田氏・ペラルル氏と共有しているフィールドデータを用いた。さらに、池間苗氏の『与那国語辞典』の音声データを池間龍三氏(福岡市在住)から借り、それを電子化したうえで、データとして使用した。

調査法は、まず与那国島で談話を収集し、それを書き起こしながら帰納的一般化を行いつつ、一方で沖縄本島や東京都、埼玉県在住の話者に聞きとり面接調査を行うという 2 つのアプローチからなる。

4. 研究成果

(1) 体系的な文法記述に関する調査法・調査項目の整理

本研究では与那国語の体系的な記述を目指しているが、そもそも琉球語の記述研究でどのような項目をどのような手順で記述すればよいかという方法論が確立されていないため、まずはその点を整理し、下地(2013)としてまとめた。この成果は、琉球語の大型の科研費(狩俣繁久氏代表、基盤 A)における文法概説の執筆項目・調査項目としても採用されており、また日本本土方言の記述においても注目されている(国立国語研究所の消滅危機方言プロジェクトで採用)。さらに、Mouton de Gruyter 社から出版される Handbook of Ryukyuan Languages の文法概説のセクションについても、上記の研究成果がもたれている。このように、上記の研究成果は琉球語研究全般・日本の危機方言研究全般に大きな波及効果をもたらしている。

(2) 文法概説と談話資料について

文法概説・談話資料は、山田氏・ペラルル氏との共著である。これは日本語による成果として山田・ペラルル・下地(2013)として出版され、英語によるものは Yamada, Pellard and Shimoji (in.press)として Mouton de Gruyter 社から出版される予定である。

与那国島方言の先行研究は、アクセントや動詞形態論など、個別の分野に関する記述のほか、比較方言学的見地からの方言横断型の研究の一部として与那国島方言を扱っていたが、この成果によって、はじめて与那国島方言の体系的な文法記述が(概説という形で)示されたといえる。章立ては以下の通りである。

音韻(音素、アクセント、形態音韻論)
品詞
形態論(名詞、動詞、形容詞)
統語論(格配列、名詞句、述語、複文)

自然談話

なお、形態論的な整理を進めるうえで、代名詞に関して他方言との比較研究として成果も発表した(下地 2013)。

(3) 統語記述(全般)について

上記の概説では表面的かつ簡略な記述にとどまっていた統語論に関して、それをさらに詳しく記述するために、以下のような内容に注目して記述を行った。その成果は現在論文としてまとめに入っており、依頼原稿として東京外国語大学記述言語学研究室論集『思言』の10号への入稿・掲載が決定している。

名詞句(修飾部, 主要部, 格, とりたて要素などごと)
述語句(名詞述語, 動詞述語, 形容詞述語のタイプごと)
文タイプ(平叙・疑問・命令)
能動とボイス派生(受動・使役・相互)
複文(副詞節, 形容詞節, 名詞節, その他諸現象)
焦点化と主題化

(4) 統語記述(格配列)について

格配列に関する研究は、本研究が最も重視し、かつ最も成果のあった領域である。与那国島方言の格配列については、これまで現代日本共通語の格配列システムを前提として不問にふされるか、あるいは「主格対格型」であるとされてきた(平山・中本 1964, 高橋 1992, Izuyama 2012, 山田・ペラルール・下地 2013)。

しかし、言語事実を詳細に検討すると、この説に問題があることがわかってきた。すなわち、Sの格標示は=ngaと無助詞の2通りあり、しかも無助詞となる場合が多いからである(山田・ペラルール・下地 2013, Izuyama 2012)。

「腐る」、「折れる」、「倒れる」など、S項が常に無助詞となるような動詞は多数存在する。話者が無助詞だけを容認する場合があるということから、=ngaが単に脱落していると考えすることはできない。すなわち、S項に対して、「基本的に=ngaをとる」と分析する実証的な根拠はない。逆に、A項に対して=ngaを省略することは容認されない。このことから、=ngaは単に省略可能な主格助詞という見方が不適切であることを示している。

このように、与那国島方言の格配列をゼロベースで問い直すという研究課題は、この言語の格配列の共時的記述において重要なトピックであるとともに、言語類型論的にも興味深いトピックである。本稿では、特に問題となるS項の格標示に注目しながら、類型論的な観点を踏まえて与那国島方言の格標示を再検討し、以下のような結論を導いた。

節タイプ(主節・連体節)と名詞句タイ

プ(代名詞・非代名詞)によって格配列が異なる。また、焦点化も、=ngaの出現に影響を与えているようだ。

連体節または代名詞の場合、=ngaはS/A項に安定してつきやすい。よって、これらの環境では主格対格型が成り立つといえる。主語が焦点化される場合も=ngaが安定してつきやすく、主格対格型の傾向が見られるが、連体節内や代名詞の場合ほど明確ではない。

それ以外(主節・非代名詞・非焦点)の場合、主格対格型は成り立たない。項の動作主性の度合いによって=ngaのつきやすさが変わり、特にS項は=ngaだけをとるものから無助詞だけを要求するものまでさまざまである。動作主性は、動詞の意味や名詞の意味によって複合的に決まる。

動詞や主語項の意味特性について、本研究では言語類型論やその他の理論で長らく議論されてきている「動作主性」(agentivity)として定義した。その原理は、有標ルール(動作主の原型に近い項に=ngaを付与する規則)と無標ルール(格標示は最小限におさえるという経済性の原則)の組み合わせからなる。本研究の分析は、無助詞をS, A, P項のデフォルト状態としている点で、先行研究が立脚していた主格対格型のシステムとは異なる。さらに、動作主性に応じて格標示が変動するシステムは広くFluid-S systemとして知られるが、そのような配列システムとも大きく異なる点で理論的にも興味深い。本研究では、さらに2つの制約(有標ルールと無標ルール)の関係から、S項は=ngaをとりやすいものからとりにくいものまで幅広く分布すると説明する。よって、本研究の成果は、文法現象を制約間の競合・調和関係でとらえる最適性理論のような理論に対してもアピールする成果である。

このように、本研究が示した格配列に関する成果は、与那国島方言の記述の進展にとどまらず、広く言語類型論・言語理論に貢献しているものであるといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計2件)

- [1] Shimoji, Michinori (forthcoming) A syntactic description of Yonaguni Ryukyuan. *Shigen* (Tokyo University of Foreign Studies Descriptive Linguistics Papers) 10. (査読有)
- [2] 下地理則. (印刷中)「南琉球与那国語の自動詞主語の格標示」筑紫日本語研究会プロシーディングス.(査読なし)

〔学会発表〕(計2件)

- [1] 下地理則 (2014) 「南琉球与那国語における自動詞主語の格標示」第252回筑紫日本語研究会.
- [2] 下地理則 (2013) 「琉球諸語の代名詞双数形 - 予備調査報告」若手研究者による国際ワークショップ「琉球諸語と古代日本語に関する比較言語学的研究」(京都大学)

〔図書〕(計5件)

- [1] Heinrich, Patrich, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji (in.press) *The Handbook of the Ryukyuan Languages*. Berlin: Mouton de Gruyter.
- [2] 下地理則 (2013) 「危機方言の文法スケッチ」田窪行則 (編) 『琉球列島の言語と文化』東京：くろしお出版.
- [3] 下地理則(印刷中) 「南琉球語与那国語の自動詞主語の格標示」田窪行則・ジョンホイトマン・平子達也 (編) 『古代日本語と琉球諸語』東京：くろしお出版.
- [4] 山田真寛・トマペラール・下地理則 2013. 「与那国語の簡易文法と談話資料」田窪行則 (編) 『琉球列島の言語と文化』東京：くろしお出版.
- [5] Yamada, Masahiro, Thomas Pellard and Michinori Shimoji (in.press) Dunan. In Heinrich, Patrick, Shinsho Miyara and Michinori Shimoji (eds.), *The Handbook of the Ryukyuan Languages*, Berlin: Mouton de Gruyter.

6. 研究組織

(1)研究代表者：

下地理則 (SHIMOJI, Michinori)
九州大学・大学院人文科学研究院 准教授

研究者番号：8 0 5 7 0 6 2 1